

【11月号:バナナの国で平泳ぎ】

【日本遠征：日本の水泳】

東京で試合観戦を終えると本格的に遠征開始です。東京は羽田空港から遠征拠点の鳥取県米子市に移動したその日から日本の選手達との練習が始まりました。時差ボケを解消しながら、最初の大会に出場です。

大会当日、早速うちの選手はカルチャーショックを受けました。参加選手達は時間通りに集合し、ウォーミングアップでは列を作って右側通行で泳ぐ。飛び込み練習は決められた時間に始まる。「言葉はわからないけど、周りを見るだけで何をすべきで何をすべきかはいいか大体わかる」と選手が言ったのには驚きでした。「マチャラの緑色のプールと違って水が透明だ」と笑ってました(笑)。

大会の運営にも関心していました。競技が時間通りに始まり終わることには「この方が選手にとってレースの準備がしやすいはず・・・」と、体験したことの無い感覚を味わったようです。

待ち時間には一緒に練習させてもらった PAJA の選手達が話し掛けてくれて、エクアドルとは違う雰囲気をまた味わったようです。中にはわざわざスペイン語の本を持ってきてくれた選手もいたり、スマートフォンのアプリで翻訳しながら会話をしたり、技術大国日本を感じました(笑)

レースはと言いますと、この日のために猛練習を重ねただけあって参加種目全てで自己記録を更新しました。200m 個人メドレーではエントリータイムより約 12 秒速く泳ぎ、周囲を沸かせてくれました。同時に関係者の方々から色々アドバイスを頂くことができ、日本遠征中の課題をより具体的に絞ることが出来ました。



【日本遠征：お互いを知る】

たくさんのご支援を頂き、遠征は大成功を収めました。選手にとっては人生を変える経験になったようです。言葉が通じない状況でいかに意思疎通を図るか、期待とは裏腹に心配もしていましたが全くの杞憂でした。「選手同士で話す時間が欲しいから通訳は要らない」と選手に言われたのです。身振り手振りでやり取りする様子がいつも興味深く、何かきっかけがあればこんなにもお互いの理解に努めることができると学ばされました。主に言語を勉強してきた僕にとって、言葉が通じる通じない以前にもっと大切なものがあると教えてくれました。そしてそれが 2020 年東京で行われるオリンピックの目指す相互理解につながるのだと確信する滞在でした。



【日本遠征：約束】

僕は日本で生まれ、今はエクアドルで働いています。選手はエクアドルで生まれ、日本を旅行しました。僕たちはエクアドルに戻りトレーニングを再開しました。しかし、配属先のプールが工事により使用不可能なので毎日違うプールで練習しています。遠征前に始まったこの工事、エクアドルに戻ると放置されていました。依頼主である配属先の費用未払いが原因だそうです。いつものプールは配属先が資金確保するまでの間使用停止になりました。他の任地で働く隊員は、選挙の結果により仕事場が無くなるなど協力隊らしい問題をかかえることが少なくないそうです。うちは選挙こそ関係ないですが、同じ状況になるなんて・・・。

突然練習場所が無くなり、選手や保護者も困っています。「でもこれがエクアドル」と言われると切なくなります。指導者がドタキャンしたり、大会会場が突然変更になったり、「大人たちが子供の育ちが悪いから(競技の成績が)悪い」と言うのを聞いたりすると、この国の水泳の発展には何が必要かわかった気がします。

そんな逆境に立たされていますが、トレーニングは欠かしません。日本から戻ると選手の練習態度が良くなり、集中力がついたのが分かりました。いい感じです。日本の選手たちとは再会を約束をしました。水泳を続けた先で再会できると信じて今日も練習に励みます。

